

- 本県有機農業は、お茶の輸出(有機JAS)が活発で、作付面積や農家戸数は着実に増加。この世界品質の有機茶と併せて、野菜や果樹の収益性や安定生産技術の確立、普及による取組面積拡大が課題
- 県内における有機農業技術等の課題整理、研究プロジェクトや現地実証に対する支援、情報の発信、技術マニュアルの作成の取組を実施
- 令和元年の目標であった、「有機栽培取組面積の経営耕地面積に占める割合を1.3%にする」をクリア

具体的な成果

1 有機農業技術等の課題整理

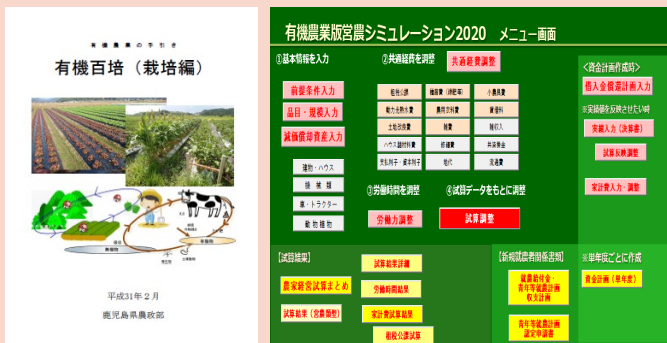
- 実態調査による課題整理
有機栽培農業者は
病害虫対策、雑草対策、土づくり
に強い関心

2 現地実証等の支援

- 地域振興局に対する支援
- 試験研究機関に対する支援

3 有機農業技術確立と情報発信

- 有機農業技術マニュアルの作成
(栽培編H30, 経営編R2)
- 有機農業技術などの継続的な情報発信
(1回発信/年)



有機農業技術マニュアル(栽培編, 経営編)

4 有機農業の取組面積の拡大

- 有機農業に取り組みやすい技術などの確立、普及活動により、有機栽培面積が増加
- 有機栽培取組面積の経営耕地面積に占める割合
目標: 1.03%(806ha) (H27) → 1,3%(R元年)
実績: 1.52%, (1,070ha) (R2年5月)

普及指導員の活動

平成30年度

- 実態調査による課題整理
- プロジェクト研究への助言, 実証ほ支援
- 有機茶生産技術の実証ほ支援
- 有機農業情報誌の発行
- 有機農業技術マニュアル(栽培編)の作成

令和元年度

- プロジェクト研究への助言, 実証ほ支援
- 有機野菜, 果樹の課題抽出, 実証ほ支援
- 有機茶生産技術の実証ほ支援
- 有機農業情報誌の発行



令和2年度

- プロジェクト研究の成果情報の発信
- 有機野菜, 果樹の課題抽出, 実証ほ支援
- 有機茶生産技術の実証ほ支援
- 有機農業情報誌の発行
- 有機農業技術マニュアル(経営編)の作成

普及員だからできたこと

日頃から農業者と信頼関係を築いている普及員だからこそ、有機農業者が自ら長年苦勞して確立してきた栽培技術や普及員とともに行った実証試験をもとにマニュアルが作成できた。今後、本マニュアルは新規に有機栽培に取り組む農業者をサポートするものとなる。

持続性の高い有機農業の推進

1. 取組の背景

本県の有機農業においては、有機 JAS で生産されたお茶の輸出が増加しつつあり、有機栽培の作付面積や農家戸数は着実に増加している。この有機茶と併せて、野菜や果樹においては、収益性の高い安定生産技術の確立、普及による有機栽培取組面積の拡大が課題である。

そこで、普及情報課では、有機農業への支援を重点プロジェクト課題として取り上げ、県内における有機農業技術等の課題整理、試験研究プロジェクトや現地実証に対する支援、情報の発信、技術マニュアルの作成などに取り組んだ。

2. 活動内容

- (1) 有機農業技術等の課題整理
- (2) 試験研究プロジェクトに対する支援
- (3) 地域振興局が実施する現地実証に対する支援
- (4) 有機農業技術確立と情報発信

3. 具体的な成果

- (1) 有機農業者に対する実態調査による課題整理

県内の主要な有機農業者 18 戸（野菜 8 戸、水稻 2 戸、果樹 5 戸、茶 3 戸）に対して、経営や栽培などの聞き取り調査を有機農業広域普及指導員や試験研究機関の研究者とともに実施した。

調査の結果、有機農業者は病虫害防除、雑草管理、土づくり等に高い関心があることやその他の課題について明らかにした。これらの課題について、平成 29 年度から研究部門が「持続性の高い有機農業技術体系の確立」で技術開発に取り組んでいる。



図1 有機農業実践の中で困難度の高い技術を選んだ有機農業者数

注) 1.提示した困難な実践技術を概ね3つ選択。農業者によっては1、あるいは2だけの選択あり。

2.管理作業は、植付や収穫などの作業管理。

3.その他は、水稻では有機農業に係る事務手続き。果樹では鳥害対策。労力不足で、適期管理が遅れがち。

(2) 試験研究プロジェクトに対する支援

鹿児島県農業開発総合センターで実施している有機農業に関する試験研究課題について、研究成果の内容等について検討した。また、研究成果の現地実証についても各地域振興局とともに試験ほ場設置や調査等を支援した。

(3) 地域振興局が実施した現地実証に対する支援

野菜及び茶に関して、地域振興局が設置した実証試験等について支援した。果樹については、現地における有機栽培農家の栽培技術等について実態調査を行い、課題整理を行った。

(4) 有機農業技術確立と情報発信

有機栽培事例を基に、野菜に関する有機農業技術マニュアル栽培編を平成30年度、経営編として有機農業版営農シミュレーションソフトを令和2年度に作成した。栽培編については、鹿児島県のホームページで公開しており、多くの方が利用できるようにした。

また、有機農業情報誌を年1回発行し、毎年400部以上を有機農業関係団体及び農業者に配布した。

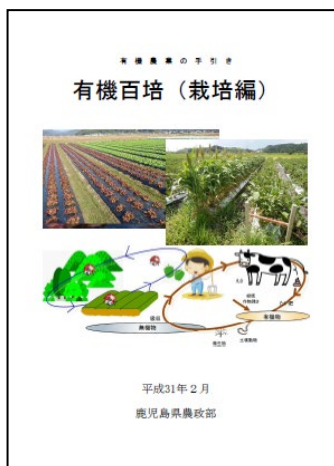


図2 有機農業技術マニュアル栽培編



図3 有機農業技術マニュアル経営編

(5) 有機農業の取組面積の拡大

本県の有機農業推進計画の目標である「有機栽培取組面積の経営耕地面積に占める割合を1.3%（令和元年度）にする」を令和2年5月には1.52%（1,070ha）とし、目標を達成した。

4. 農家等からの評価・コメント

(1) 果樹の有機栽培農家（いちき串木野市，H氏）

ポンカンの有機栽培に取り組んでいる。これまで実践してきた天敵を利用した防除方法など、効果的であることが分かり、今後の取り組みの自信

となった。また、有機栽培に向く品種など紹介してもらった。このような普及指導員の指導によって、今後、有機栽培を志向する農家の取り組みが進めやすくなると思う。

(2) 茶の有機栽培農家（霧島市牧園町，Y氏）

現在、茶の有機栽培を行っており、病虫害の発生抑制は大きな課題である。今回、被害が増えてきているマダラカサハラムシを対象に、更新時期を変えた抑制効果を調査したことで、7月20日頃に秋芽を萌芽させると被害を抑えられ、その後の管理にも問題ないことがわかった。具体的な日付や生育程度がわかったことで、他の茶園にも活用していけると思う。

(3) 野菜の有機栽培農家（南さつま市，F氏）

新規で有機人参を栽培する時に普及指導員より有機農業技術マニュアルを基に施肥や雑草対策等について詳しく説明を受けた。お陰で自信をもって取り組めるようになった。

5. 普及指導員のコメント（鹿児島県農業開発総合センター普及情報課・専門普及指導員・長友誠）

有機栽培で一定水準の生産性を維持するためには、農作物が健全に育つ環境づくりを行うことが基本である。具体的には、生産安定のための土づくりを行うことと連作障害や病虫害の多発生を避けるための輪作を行うことが重要である。また、有機栽培を持続的に実践していくためには、技術的視点だけでなく、流通・販売を含む経営的な視点も含め総合的に考慮する必要がある。

6. 現状・今後の課題等

有機農業の取組は、生物多様性保全や地球温暖化防止等に高い効果があると近年明らかにされてきており、有機農業を自然循環機能の増進やSDGsの達成に貢献するものとして推進し、その特徴を消費者に訴求していくためには、有機JAS認証等、一定水準以上の有機農業を推進することが重要となる。

また、有機農業の取組水準を一定以上として推進することは、産地においては農業者間の栽培技術の共有等を容易にし、円滑な人材育成や産地づくりにつながる。さらに、取引先のニーズ等を踏まえ、必要に応じ有機JAS認証を取得できる環境を作ることは、販売機会の多様化の面で有益である。

こうしたことから、本県では、人材育成、産地づくり、販売機会の多様化、消費者の理解の増進に関する施策の推進に当たって、国際的に行われている有機農業と同等性が認められている有機JASに定められた水準以上の取組を推進し、その支援に努める。